

第2特集：ナイチンゲール アップデート

ナイチンゲールの名言秘話

金井一薫

看 護 教 育

第55巻 第9号 別刷

2014年9月25日発行

KANGO-KYOIKU (The Japanese Journal of Nursing Education)

Vol.55 No.9/SEP. 2014

医学書院

ナイチンゲールの名言秘話

金井一薫 東京有明医療大学特任教授/ナイチンゲール看護研究所首席研究員

『Notes on Nursing』の 出版にまつわる事実

ナイチンゲール看護研究所の書庫には、ナイチンゲールが書いた3種類の『看護覚え書』の原書が、桐箱の中に保管されている。

初版本は1859年に出版されており、138 mm × 213 mm、79ページの比較的薄手の本である。各章ごとのページの区切りもなく、びっしりと小さな活字が並んでいる。本の構成は、「はじめに」に次いで、「看護覚え書——看護であること・看護でないこと」というタイトルの序文があり、その後1章から13章までの本文があって、最後に「おわりに」が配置されている。巻末の資料としては、“大英帝国において看護師として雇用されている女性の数に関する覚え書”が表と共に2枚入っている。

初版本は、『看護・医療の歴史』(1978年)の著者、J.A. ドランによれば、「1859年12月に刊行され、本書が出版されるや、著者の知名度と相まって1か月とたたないうちに1万5,000部が売れた」とされる画期的な著作である。

第2版の「増補改訂版」は、初版本が売れていた1860年7月に刊行された。大きさは139 mm × 215 mm、221ページで、大幅な改訂が行なわれ

たことがわかる。活字も大きく読みやすくなり、章ごとの区切りも付けられ、各ページの左右にスペースをとって、内容の要約が書かれている。

初版本との大きな違いは、改訂版には15章として「補章」が追加されていることである。補章は7項目で構成されており、そこには「1. 看護師とは何か」「2. 回復期」「3. ロンドンの子供たち」などの記述が加筆されて、より内容の濃いものに仕上がっている。

そして翌年の1861年4月には、第2版に続いて第3版が刊行された。

第3版は、「労働者階級版」と称され、大衆向けのために2シリングという安価での販売である。(1ポンド=20シリング、1シリング=240ペンス。現在ではシリングは使われていない)第3版の刊行予告は、第2版の最後のページに「薄表紙の2シリングの版も発刊されます」という表示があることで、その印刷は第2版の刊行当時、すでに計画されていたことがうかがえる。

第3版は、予告通りの小型な廉価本で、大きさは105 mm × 170 mm、114ページに縮小された。活字は初版と同じ大きさで、1ページに小さな文字が隙間なくぎっしりと印刷されている。ナイチンゲール看護研究所が所有する第3版には、その冒頭にナイチンゲールの言葉が添えられている。

1867年9月と明記されたそこには「この版は、労働者階級の人びとに活用されるように、原本からの必要な抜粋と、追加説明を行なっている。また子どもたちのために“赤ん坊の世話”を付録として載せた」と書かれている。

このように労働者階級版とされる第3版は、第2版のなかで難しいと指摘された内容や、わかりにくいと思われる記述を削除し、さらによりわかりやすくするための説明文が追加されたと見てとることができる。

以上が、日本で親しまれている『看護覚え書』の出版をめぐる秘話である。

『看護覚え書』には、このように出版の背景が異なる3種類が存在するのである。短期間に3種類もの『看護覚え書』を刊行したところに、本書に対するナイチンゲールの並々ならぬ熱意と意図を感じとることができる。

その意図の第1点目は、初版本と第2版との相違に見ることができる。この2冊を比較して気づくのは、まずはその装丁である。第2版のほうが断然に読みやすく、何よりも本としての美しさがある。さらに第2版には「補章」が追加されており、そこに「看護師とは何か」が明記されている点を見逃すことはできない。1860年といえば、ナイチンゲール看護学校が創設された年である。ナイチンゲールは、本書を通して家庭の健康を守る女性たちに看護のあり方を明記しただけでなく、病院にあって看護を新たな職業とすべく訓練を受ける女性たちに向けても、そのあるべき姿を明らかにしたかったのである。ちなみに第2版は、当初のナイチンゲール看護学校の指定図書に選定されているばかりか、見習生はまず「補章・看護師とは何か」から読むようにとの指示があったことが明らかになっている¹⁾。

第2版と第3版との相違点も際立っている。第3版では、第2版の内容の抜粋や加筆がなされているが、抜粋という点で特に目立つのは「序章」の冒頭部分である。

第3版には“病気とは何か”から始まる記述が完全に削除されており、第2版の第3節にあたる部分から書き出されている。「病気とは回復過程という性質をもつ」というナイチンゲールのオリジナルな看護思想は、当時の人びとの理解を得るのは難しかったのであろう。ここにもナイチンゲールの意図が感じられる。

こうして初版本から第3版までの推移を見てみると、後世の看護師たちが読むべき『看護覚え書』は、第2版であるということが明白となる。ナイチンゲールは、第2版のなかに彼女の看護思想を存分に注ぎ込んだ形跡があるからである。

そして今、日本の看護教育界においては、「第2版」を採用してナイチンゲールの看護思想を学んでいる学校が多い。この現象は世界でも例がなく、『看護覚え書』の思想は、唯一日本において継承されているといっても過言ではない。私たちはそのことに誇りと自信をもつべきであろう。

ネット上に出てくる 「ナイチンゲールの名言」の実態

最近の仕事上で、あるいは学習上で、何か調べたいこと、わからないことがあると、誰でも安易にインターネットを利用しようとする。そこから得られる知識が正確であれば、これほど便利なものはない。しかし、もしネットから得られる知識に誤りがある場合は、いったい誰がその責任を取るのだろうか。多くの人が一度に見ることができるだけに、訂正されないままにその内容が一人歩きをしてしまう事態は、大きな問題である。

エピソードの2点目として、ネット上で取り上げられている「ナイチンゲールの名言」に焦点を当て、現状から見えるいくつかの「曖昧さ」について指摘したい。

インターネットで「ナイチンゲールの名言」を検索すると、およそ30個の文章が出てくる。どのサイトでもほとんど同じ文章を紹介しているの

で、もともになるサイトがあると思われるが、それは定かではない。

筆者が危惧するのは、サイト上に紹介されている「ナイチンゲールの言葉」には、その出典が明記されていないか、曖昧な記述しかないという点である。これではナイチンゲールが本当にそう言ったのかが分からず、信頼できないのである。またそれゆえに公の場において、その言葉をナイチンゲールの言葉として引用できない。

ナイチンゲールはその90年という生涯のなかで、おびただしい文章を書き残している。印刷された文献が多いが、印刷されていない書簡の類も相当数存在する。したがって、一般的にはすべてを読むことは不可能である。故にその出典が明記されていないかぎり、ナイチンゲールの言葉であるとの保証はどこにもないのである。ネットで「ナイチンゲールの名言」を紹介される方々に、くれぐれもお願いしたい。配信するナイチンゲールの言葉は、紹介者の推測や超意識をせず、必ずその出典を明記して、できれば「原文」を生のまま掲載してほしい。

ここでは、ネット上に出てくる「名言」のなかで、「天使とは、美しい花をまき散らす者でなく、苦悩する者のために戦う者である」を取り上げてみたい。

一見、ナイチンゲールの言葉のように見受けられるが、これにも出典がない。本当にナイチンゲールはこういう表現をしたのだろうか、という疑問が生じるのである。

そこでこの言葉の出典を調べてみた。キーワードは「天使」である。「天使」という単語は、『看護覚え書』にも、『ナイチンゲール著作集』にも、また『ナイチンゲール書簡集』にも出てこない。リン・マクドナルド博士が編纂した『The Collected Works of Florence Nightingale』全16巻を調べても、「angel」という単語は見当たらない。となれば、あとは伝記類のなかから探すしかない。

そしてついに、Sir Edward Cook, 中村妙子・

友枝久美子訳：ナイチンゲール——その生涯と思想Ⅰ～Ⅲ、時空出版、1993年の第2巻376ページの中に「angel」を見つけた。中村・友枝訳の該当部分を引用してみよう。

「天使とは、花をまきちらしながらそぞろ歩きする暇人ではありません。やんちゃないたずら子だって、ときにはそうするでしょう。ならず者でも、そうするに違いないのです。『白衣の天使』とは、病棟の雑役婦、もしくは掃除婦たちと変わらず、人の忌み嫌う仕事をきちんと果たし、健康への復帰の道にある障害物を取り除き、汚水を捨て、患者の体を洗い、しかもめったに感謝されない人たちです。こういう人たちこそ、真の意味の白衣の天使なのです。」

「The Angels are not they who go about scattering flowers : any naughty child would like to do that, even any rascal.

The Angels are they who, like Nurse or Ward-maid or Scavenger, do disgusting work, removing injury to health or obstacles to recovery, emptying slop, washing patients, etc., for all of which they receive no thanks. These are the Angels.」

原文を読むと、ネットで紹介されている文章とは、意味合いがずいぶん異なっていることがわかる。原文では天使とは苦悩する者のために“尽くす者”というニュアンスがあるが、ネットではそれがいつの間にか“戦う者”に変化している。紹介者が、ナイチンゲールは戦う女性であったというイメージをもっていると、ついこういう表現にしてみたくなるのかもしれないが、この原文には、看護師のあり方の基本が説かれているだけに、誤解のないように、正確な日本語を駆使して紹介しなければならないだろう。

ところで、日本では一般的に看護師のことを「白衣の天使」という。これはナイチンゲールのクリミアにおける別名だと信じられているし、中村ら



日差しを受けるナイチンゲールのお墓



教会内部に展示されている埋葬当日のお墓と老人の模型

訳者も angel をわざわざ「白衣の天使」と訳している。しかし海外ではナイチンゲールや看護師のことを angel とは言わないようだ。英国では、ナイチンゲールを“The lady with a lamp”（ランプを持った貴婦人）と呼んでおり、「白衣の天使」という表現は使っていない。

そこで、「天使とは、美しい花をまき散らす者でなく、苦悩する者のために戦う者である」という言葉を、以下のように書き換えることを提案したい。

「天使とは、花をまきちらしながら歩く者ではなく、人を健康へと導くために、人が忌み嫌う仕事を、感謝されることなくやりこなす者である。」

この文章ならば、ナイチンゲールも納得してくれるであろう。

ナイチンゲールの埋葬について

2014年6月30日(月)の午後、筆者は4回目となるナイチンゲールの墓参りをすべく、聖マーガレット教会を訪れた。そこで新たにわかった事実がある。それは「ナイチンゲールの遺骸がどのようにして運ばれたのか」についてである。

当初、英国政府は亡骸をウエストミンスター寺

院に祀る予定であった。しかしこの計画はナイチンゲール自身の遺言によって否定され、両親が眠るイースト・ウェロー村はずれのこの教会に埋葬されたのだ。ロンドンから教会の最寄り駅までは列車で運ばれ、そこからは陸軍の兵士たちによって搬送されたようである。埋葬の日は雨模様であったが、関係者が多数参列した。そのなかに1人、クリミア戦争中にナイチンゲールに看病された元兵士が姿を現した。年老いた彼は、当時を偲んでナイチンゲールに敬礼し、涙を流したという。

ナイチンゲールのお墓には、没後100年を経過した今なお、世界各地から彼女を偲ぶ人びとが訪れている。13世紀からこの地に静かに佇んでいる古刹は、喧騒を嫌ったナイチンゲールには似合いの安眠の地だと思う。もうじき彼女の生誕200年である。2020年にはこの地も再び賑わうことであろう。

●参考文献

- 1) Lucy Seymer, Florence Nightingale's Nurses 1860-1960, p.160, Pitman medical Publishing Co. Ltd, 1960.

金井一薫 ●かないひとえ

〒135-0063 東京都江東区有明2-9-1

東京有明医療大学看護学部